博士学位請求論文審査要旨及び担当者

報告番号　甲　乙　第　　号　　氏名　山口元樹

論文審査担当者

主査　　慶應義塾大学文学部教授　　長谷部史彦

　　文学研究科委員

副査　　慶應義塾大学言語文化研究所教授　　嶋尾稔

副査　　立教大学文学部教授　　弘末雅士

論文題目　インドネシア国家形成期におけるアラブ人団体イルシャードの変容

—イスラーム改革主義・教育・国民統合—

論文概要

本論文は、オランダ領東インド及びインドネシア共和国のハドラミー（アラビア半島のハドラマウト地方出身者）を多く含むアラブ人コミュニティにおいて、主要なイスラーム改革主義の団体であったイルシャードに考察対象を絞り、20 世紀初頭から中葉にかけてのインドネシア国家形成期におけるその歴史的変容を詳細に論じた労作である。山口君は、イルシャードに関する先行研究の限界を遥かに超え、同団体の形成と展開、指導者スールカティーのイスラーム改革主義思想の特徴と影響、教育を中心とした同団体の活動の実態や中東の著名なイスラーム改革主義者との諸関係、帰属意識や国民統合をめぐる同団体の変容などの諸問題について、多様な関連諸史料の丁寧な分析に基づき明らかにしている。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

　Ⅰ　問題の背景

　Ⅱ　先行研究と問題の設定

　Ⅲ　史料と章構成

第１章　イルシャードの設立者

　　—マッカにおける経歴—

　Ⅰ　東インドとマッカ

　Ⅱ　マッカの教育改革運動とスールカティーの経歴

第２章　イルシャードの結成

―東インドにおけるアラブ人の「覚醒」とイスラーム改革主義―
Ⅰ　「アラブ人の覚醒」
Ⅱ　アラウィー・イルシャーディー論争の発端
Ⅲ　結成時のイルシャードの性格
第 3 章　ナショナリズム形成期におけるイルシャードの動向
―公教育とイスラーム運動―
Ⅰ　公教育の拡充
Ⅱ　東インドのイスラーム運動
Ⅲ　二方向の「巡礼」
第 4 章　アラウィー・イルシャーディー論争の収束
Ⅰ　東方連盟の仲介による和解交渉
Ⅱ　イスラーム改革主義者たちによる仲裁の試み
第 5 章　帰属意識をめぐる議論とイルシャード
―ハドラマウトかインドネシアか―
Ⅰ　帰属意識の分裂
Ⅱ　二方向の教育活動
Ⅲ　「アラブ人協会」から「イスラーム協会」へ
第 6 章　独立後のインドネシア社会への統合
Ⅰ　アラブ人コミュニティの状況の変化
Ⅱ　1950 年代のイルシャード
終章

各章の要旨

序章では、オランダ領東インド（以下、東インドと略記）の「外来東洋人」に区分されたアラブ人コミュニティの概要がまず示される。20 世紀初頭に当地のイスラーム教徒の近代的覚醒が始まると、アラブ人たちは初の近代的イスラーム団体のジャムイーヤト・ハイルを結成したが、ムハンマドの血統保持者をめぐる論争から分裂し、1914 年にイルシャードがバタヴィアで誕生する。イルシャード結成に至る背景の説明に続き、先行研究が批判的に検討される。山口君は、イルシャード研究の現在の到達点を示すモビニ = ケシェーの研究書がハドラミー意識を軸に論じ、イスラーム改革主義に関する検討が殆どないことに疑義を呈する。そして、イスラーム改革主義運動という超地域的視座からのイルシャードの性格の解明とアラブ人コミュニティのホスト社会への統合におけるイルシャードの役割

の検討を主要な問題と位置付ける。また、アラビア語やムラユ語（マレー語／インドネシア語）の定期刊行物・著作・冊子類、オランダ政庁の公文書など多彩な依拠史料の概要と特徴が述べられる。

第 1 章では、イルシャードの指導者であり、スーダン出身のスールカティーのマッカ（メッカ）滞在時代が取り扱われる。彼の経験とイスラーム改革主義者としての成長が伝記記述などに基づき解明され、また、当該期マッカにおける教育改革運動の実態と影響が論じられる。はじめに、背景をなす東インド・マッカ間の学術ネットワークが俯瞰される。続いて、19 世紀後半以降マッカの高等教育の中心であったハラーム・モスクに代表される伝統的イスラーム教育の実態が示され、これに対する新型の「アフリー（民間）」のマドラサ（学校）における近代的なイスラーム教育改革運動の諸相が論じられる。さらに、スールカティーのマッカでの学習内容や教師が吟味され、教師たちの中に上記の教育改革運動を担った学者が多く含まれ、東インド赴任以前のスールカティーが改革主義的な新型マドラサのファラーフ学院で教育に携わっていたことに特段の注意が払われる。

第 2 章では、20 世紀初頭東インドのアラブ人コミュニティのナフダ（近代的覚醒）がイスラーム改革主義との連関で論じられ、イルシャード結成の経緯と初期の特性、そこでの指導者スールカティーの位置が考察される。上記のナフダの実相をイルシャードの母体ジャムイーヤト・ハイルの教育活動を中心に検討し、ナフダの諸要因として、アラブ人の経済力や出版業への関与、アラビア語定期刊行物の流入、オスマン帝国の奨学金制度の活用、アラブ人教師の招聘の諸点が論述される。次にアラウィー・イルシャーディー論争について、ムハンマドの血統保持女性への婚姻規制とムハンマドの血統保持男性への口づけの慣習という争点が詳論され、イルシャードの出現に繋がったこの論争の要因が、アラブ人の経済的成功者の増加やイスラーム改革主義運動による血統保持者の宗教的権威の揺らぎにあったとする。続いて、宗教的権威への挑戦とイスラーム改革主義の運動の結合から生まれたイルシャードの当初の性格が分析される。その内部の葛藤にも目配りし、イルシャードには「ハドラミーの組織」の色彩が濃厚ではあったが、その学校はプリブミ（「原住民」）などイスラーム教徒全体に開かれ、また、各法学派の権威を否定するイスラーム改革主義の立場とシャーフィイー学派に固執するハドラミーの立場がせめぎ合っていたとする。

第 3 章では、1920 年代に至る植民地社会の展開を踏まえつつ、イルシャードの動向が教育とイスラーム運動の二点に絞って論じられる。まずオランダ政庁の「倫理政策」期における公教育の概要が示され、続いて、インドネシア・ナショナリズムが形成されるこの時期に、イスラーム運動におけるアラブ人の位置が如何に変化したかについてイルシャードの動向を中心に論じられる。華人に対するプリブミとアラブ人の「共同戦線」として台頭

したイスラーム同盟がやがてプリブミのみの組織と化し、アラブ人の参加が途絶えるまでの経緯が明らかにされる。また、1920 年代に伝統派と改革派の団結を目指した東インド・イスラーム会議におけるプリブミ意識の高揚、さらにはカイロのカリフ制会議に派遣される東インド代表からアラブ人が排除される過程が検討され、山口君は、にもかかわらずアラブ人たちは経済力や中東とのネットワークを活かして同会議に貢献していたと評価する。そして、1920 年代後半の中東情勢の変化や東インドにおけるイスラーム同盟とムハマディヤの対立という状況下に、イスラーム同盟とイルシャードの関係強化が進展した事実に注目し、当該期のプリブミのイスラーム勢力とアラブ人コミュニティの関係を軽視してきた従来の見方に修正を迫る。また、当該期のイルシャードの教育活動が細かく検証され、公教育制度からの分離と中東への接近を強調する従来の見解も批判し、スールカティーの言動や教育構想の分析を中心に、公教育制度への適応と中東の教育機関との連結という二つの方向がみられたことを実証する。

第 4 章では、1930 年代におけるアラウィー・イルシャーディー論争の収束過程が新たな視座から考察される。まずエジプトの東洋連盟（ラービタ・シャルキーヤ）の仲裁による和解交渉が前史的に取り上げられ、1920 年代後半のこの和解交渉では、前記の婚姻規制や口づけの問題からラカブ（尊称）の適用及び系譜の正しさの問題へと争点の変化がみられたことが指摘される。東洋連盟はこの新たな二つの争点に配慮した和解案を示したが、結局イルシャードと対立するアラウィーたちの支持は得られず、その後 1932 年にラシード・リダーとシャキーブ・アルスラーンという中東の二人の著名なイスラーム改革主義者による仲裁が始まった。リダーの和解案は、上記二点でアラウィー側に与しつつ両派が団結するよう求める内容であり、イルシャードはこれを拒否した。他方、アルスラーンの和解案は一点目につきイルシャードを支持し、二点目についてはアラウィー側に与する内容であり、イルシャード側に受諾されなかった。しかし、こうした仲裁に際しての議論は両派に影響を及ぼし、1934 年以降の論争の鎮静化に寄与したとする。また、これを機にイスラーム改革主義の「平等主義」がアラブ人コミュニティ全体の主要な論調となった点に着目し、インドネシア・アラブ人協会の出現を論争の鎮静化の帰結とみる新見解を提示する。

第 5 章では、イルシャードを中心に、1930 年代後半以降に焦点化したアラブ人コミュニティの帰属意識の問題が論じられる。はじめに、プリブミを中心にインドネシア人意識が高揚する中でアラブ人コミュニティに顕在化した、「ハドラマウトかインドネシアか」という帰属意識の分裂が扱われる。1930 年代にはハドラマウトの改革に関わるイルシャード内の動きも目立った。こうした「ハドラマウト志向」に対し、プリブミを母に持つプラナカンのアラブ人を中心に、インドネシア・ナショナリズムを掲げるインドネシア・アラブ人

協会が結成され、そこにイルシャード構成員の参加もあり、1930 年代後半のアラブ人コミュニティでは帰属意識をめぐる葛藤が強まった。また、オランダ政庁の公教育制度への不適合に危機感をもつアラブ人コミュニティでは、①イスラーム世界の近代教育の中心地エジプトへの留学生派遣、②公教育制度に対応した学校開設という二つの動きがあり、その具体相がイルシャードを中心に論述される。続いて、スールカティーの言説の変化が注視される。トルコの世俗主義の台頭を危険視する彼は、東インドに教育を限ってプリブミのムスリムと協力する「現地志向」を示すようになった。かくして 1930 年代のイルシャードでは「現地志向」と「ハドラマウト志向」が並存し、最終的に「現地志向」が主流となった。イルシャードの特徴は、アラビア語教育を通じて「アラブ人性」の保持を図った点にあるが、「アラブ人協会」から「イスラーム協会」への変容は進んだ。その背景として、プラナカンが大勢を占めるに至った当該期のアラブ人コミュニティの変容が指摘される。

第 6 章では、インドネシア共和国の独立後、1950 年代のイルシャードの活動に照準を定め、ホスト社会への統合が決定する過程が論じられる。はじめに、日本軍政期から 1950 年代初頭までのアラブ人コミュニティ及びイルシャードの変化が扱われる。日本の軍政初期にはイスラーム団体の連合組織 MIAI の運営を担う顧問会にスールカティーが加わったが、彼が死去した 1943 年に新設された宗教組織マシュミにイルシャード構成員の参加はなかった。日本の軍政による従来の公教育制度の破壊により、イルシャードなどアラブ人コミュニティによる同制度の活用の動きは無に帰した。また、ハドラマウトとの関係の断絶など日本支配は甚大な影響を及ぼした。独立革命期にはアラブ人の大多数がインドネシア共和国側を支持し、独立後にその国籍を選んだ。1949 年以降、機能を回復したイルシャードは、主要なイスラーム政党であるマシュミ党と緊密な関係を築き、アラブ人組織としての性格の表出を止めた。また、イルシャードの諸学校では、インドネシア政府の新しい教育政策に応じて一部を除き教育言語がアラビア語からインドネシア語へと切り替わった。以後現在に至るまでイルシャードは、「アラブ人組織」ではなく「インドネシアのイスラーム組織」であることを強調してきたが、アラビア語能力の喪失への危機感からその語学教育を重視した同団体のプサントレンの設立が 1980 年代以降目立つことにも注意が払われる。

終章では結論が示される。イルシャードには「ハドラミーの組織」と「イスラーム改革主義組織」という両面が存在し、後者が同団体に理論的根拠を提供し、その活動を規定していた。結成時からの指導者スールカティーのイスラーム改革主義思想の特徴は、その「平等主義」にあった。ムハンマドの血統保持者の権威に抗したこの「平等主義」は、当初パン・イスラーム主義的な色合が濃かったが、1920 年代以降「現地志向」へとその重心を移し、それが最終的にイルシャードの 1950 年代以降のインドネシア社会への統合に寄与した

とする。最後に山口君は、イルシャード以外のアラブ人団体のインドネシア社会への統合の問題、さらにはインドネシア社会がアラブ人を「インドネシアのムスリム」として受け入れていった要因や過程の総合的検討を今後の研究課題としている。

審査要旨

オランダ領東インドとインドネシア共和国のアラブ人コミュニティにおける重要団体イルシャードを歴史的に解明した本論文の先行諸研究に対する卓越性は、特に以下の諸点において確かに認められる。

第一に指摘すべきは、アラビア語、ムラユ語、オランダ語、その他の多様な言語で記された当該テーマに関する同時代史料をインドネシア、オランダ、エジプトなどに長期に滞在して徹底的に調査し、新史料を含むそれらを丹念に読み込み、膨大な記述情報から独創的な歴史像を構築することに成功したという点である。とりわけ、主要史料であるアラビア語やムラユ語の定期刊行物の渉猟と内容精査・検討が、日本はもとより世界的にみても当該テーマの先行諸研究を大きく超える実証的成果へと結実した理由といえよう。

二点目は、団体のハドラミー的性格のみが重視されてきたイルシャードについて、表面的言及に止まっていたイスラーム改革主義の教育団体としての性格と動態を精細に把握し得たことである。山口君は、ハドラミー組織としての性質の強調とイスラーム改革主義組織としての検討の不足が中心的指導者のスールカティーの軽視に繋がってきたとし、近代イスラーム改革主義のオランダ領東インドへの注目すべき導入者であるこの教育者の言動とその指導性に関する追究に力を注いでいる。こうしたユニークな視角からの考察の結果、スールカティーが同時代のイスラーム世界における改革主義的動向の思想・教育的連関の中で、オランダ領東インドの諸問題に柔軟に取り組んでいたことが初めて明示された。東南アジア史においてアラブ人思想家・教育者の移住を介した斯様な広域的連関を実証的に解明した研究は稀有であり、従来の移民やディアスポラの研究の枠を超えて、思想や教育の面を深く掘り下げた本論文の特筆すべき長所であるといえよう。

三点目は、スールカティーの「平等主義」的なイスラーム改革主義の思想と実践がイルシャードという団体とその教育活動に与えた影響を解明し、それがアラブ人コミュニティのインドネシアへの統合を促す方向に作用したことを示した点である。イスラーム世界の一体性を強調するパン・イスラーム主義者であったスールカティーは、中東で台頭する世俗主義への懸念から 1920 年代末以降「現地志向」へとその重心を移し、マジョリティのプリブミのイスラーム教徒との「平等主義」的連帯へとアラブ人たちを導き、最終的に 1950 年代以降のアラブ人のインドネシア社会への統合に寄与したという新見解が実証的に提示

されている。山口君も自覚するように考究対象の拡大は今後必要だが、インドネシア国家形成期の理解に一つの修正を迫る事例研究の貴重な成果といえるだろう。

四点目は、イルシャードの創設理由であり、1910 年代から 30 年代まで続いたアラウィー・イルシャーディー論争の展開と特質を詳解し、イスラーム世界史研究に向けてその重要性を知らしめたという点である。ムハンマドの血統保持を主張するハドラマウト系「貴種」の系譜の正統性を重視する集団と、平等主義を唱えるイスラーム改革主義集団がイスラーム世界の「周辺部」のオランダ領東インドで鋭く対峙していたという史実は刮目に値する。また、論争の収束に関して、インドネシア・アラブ人協会の出現に両派が危機感を抱き和解したとする従来の誤解を退け、イスラーム改革主義の国際的権威の和解勧告が影響を与えた論争の収束こそがインドネシアの国民統合に積極的な上記の協会の形成を促したとする新見解を提示している。また、論争の仲裁を試みたイスラーム改革主義の論客、ラシード・リダーとシャキーブ・アルスラーンという著名な両思想家の研究への新たな貢献も見落とせまい。

以上のように、オランダ領東インドとインドネシアのアラブ人コミュニティ研究における意義はいうまでもなく、アラブ史やイスラーム世界史に対しても新たな学術的貢献が確認される本論文であるが、残された課題もないわけではない。本論文の斬新さは、前記のようにイスラーム改革主義の思想とその伝達を視野の中心に据えた東南アジアのアラブ人コミュニティ研究という点にあるが、考察対象のイルシャードという団体の財務や経済基盤、団体構成員や運営校の学生たちの東インド社会内の位置と家族・地縁的結合といった社会史や経済史の面についての論述は断片的といわざるを得ない。イルシャードの集団内部の権力・権威構造に関しても、構成員たちの実態と変化をさらに具体的に把捉する必要があるだろう。また、本論文のスールカティー研究としての価値は極めて高いが、共産主義や世俗主義的ナショナリズムの運動が高揚したオランダ領東インドの動向に、この指導者及びイルシャードが如何なる眼差しを向けていたのかという問いへの答えは用意されていない。プリブミのイルシャード観の通時的解明、さらには、山口君がその必要を自覚する日本軍政期のアラブ人コミュニティに関する日本側の史料の調査や研究も今後の興味深い課題といえよう。

こうした諸課題があるとはいえ、山口元樹君の本論文は、20 世紀初頭から中葉のアラブ・イスラーム世界とオランダ領東インド／インドネシア社会の双方に対して、両者を媒介するイスラーム改革主義集団に関する実証研究により新たな光を当てた極めて独創的な学術的成果であり、審査員一同は博士（史学）の学位に十分に値するものと判断する。